

筑 後 国 府 跡

第151次調査

1998

久留米市教育委員会

序

筑後平野の中心に位置する久留米市は、豊かな自然環境の下、地域色あふれる文化が花開き、歴史と伝統が築かれてまいりました。これは古代から今日に至るまで綿々と人々が集い、交流し、知性を磨いた結果でありましょう。

ふるさとの生成の過程を追求することは、郷土愛を育み、先人達が残した文化を子孫に伝承し、さらに新しい文化の形成に貢献するものと考えます。

筑後国府跡は、今回の調査で151箇所を数えます。これまでの調査の結果、数多くの知見を得ることができ、その成果は考古学・古代史および様々な分野の研究資料として活用して頂き、喜ばしいことであります。

第151次調査は共同住宅建設に先立って実施したものです。本書が埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育・生涯教育さらには学術研究に活用頂ければ幸いに存じます。発掘調査に際しまして、多大のご理解を頂きました地権者の[REDACTED]氏および関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成10年2月28日

久留米市教育委員会
教育長 桑野善吾

例言

1. 本書は、共同住宅建設に先立って久留米市教育委員会が受託事業として、平成9年度に発掘調査を実施した、久留米市合川町字南所在の筑後国府跡第151次調査の記録である。
2. 発掘調査は教育文化部文化財保護課の園井正隆が担当した。
3. 本書に掲載した図面の作成・製図は園井と米澤美詠子・友田美穂・龍直美が行い、遺構・遺物の写真は園井が撮影した。
4. 調査に関わる遺物・記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
5. 本書の遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成し、図面の方位はすべて座標北を示す。遺構の略記号は、SB…掘立柱建物、SD…溝、SK…土坑、SE…井戸、SX…その他の遺構を表す。
6. 本調査の略記号はTKH-151、調査番号は199726である。遺構番号は本次数独自の番号を付した。
7. 本書の執筆・編集は園井が担当した。

目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の経緯	3
IV. 検出遺構と遺物	4
1. 遺構について	4
2. 遺物について	8
V. まとめ	12

I. はじめに

1. 調査に至る経過

筑後国府跡は、久留米市街地の東方の合川町に所在する。周知の遺跡の中でも、最も重要な遺跡であることは地元ならびに市中に浸透している。

平成9年4月7日に[]氏から久留米市合川町字南1143（開発面積702.14m²）にかかる埋蔵文化財包蔵地有無の確認依頼書が提出された。周辺の調査成果を照らし合わせると埋蔵文化財包蔵地であることは間違いないと考えられたが、本調査を実施するに当たって遺跡状況を事前に確認する意味で、現地に2本の調査トレンチを設定して土層状態・遺構の密度・遺物の出土量などを確認した。4月9日に地権者に調査要の回答を行った。数度の協議を行い、調査期間・調査面積・調査費用の負担などについて協議が整った。9月17日に、発掘調査の依頼と「法57条の2の1」の発掘届が地権者から提出された。これを受け、『筑後国府跡第151次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書』を9月30日に締結した。

調査面積は約300m²で対象地の北半部に調査トレンチを設定することにした。調査は10月1日から開始し、10月31日に現地における作業を終えた。その後、平成10年1月5日から2月27日までを室内整理作業に充てた。

2. 調査体制

今回の調査にかかる組織体制は次のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	桑野 善吾
	教育文化部長	坂田 博春
	社会教育担当部長	矢次 敏孝

調査総括：教育文化部文化財保護課長	古賀 幸男
主査	萩原 裕房
埋蔵文化財主査	櫻井 康治
文化財主査	松村 一良

調査庶務：古賀 直喜

調査担当：園井 正隆

調査委託：[]

調査にかかる作業従事者は以下のとおりである。

現地作業：今村美津子・岡 富士子・椎島ミドリ・高良トミ子・中野 芳子・馬場 幸子
 福田ふくみ・山田 治代・柳 鈴子・与賀田小夜子・良永 洋子・吉村 智子
 柴田 友子・柴田マチ子

整理作業：米澤美詠子（非常勤）・荒巻 悦子・友田 美穂・野口 晴香・福田 澄子・龍 直美

なお、調査にあたって、積水ハウス株式会社千守嘉隆氏には数々の便宜を図っていただいた。また、近隣の方々には調査に際しご理解をいただき、記して感謝の意を表したい。

遺構・遺物の検討に当たっては、文化財主査の松村の協力を得た。

A detailed black and white map of the Aomori City area, showing the Aomori Bay and the Aomori River. The map is overlaid with a grid of numbered circles (1-13) indicating specific locations. The map includes various landmarks, streets, and geographical features. The title 'AOMORI' is visible in the top left corner.

1. 第151次調査
2. 前身官衙建物群
3. 第1期国府（古宮地区）
4. 第2期国府（阿弥陀地区）
5. 第3期国府（朝妻地区）
6. 第4期国府（横道地区）
7. ヘボノ木遺跡
8. 神道遺跡
9. 下見遺跡
10. 西小路遺跡
11. 北屋敷遺跡
12. 西屋敷遺跡
13. 南菰稻荷遺跡

後者は埋土状態から判断すると、空堀であったと推定されている。

第151次調査地の周辺で行った調査の結果によると、第67次調査で四面庇建物を中心に5間×3間の南北棟建物や5間×2間の東西棟建物が検出されている。柱掘形から遺物が殆ど出土していないため、直接的な時期決定はできないが、枝光台地の中央を南北に走り前身官衙の東限とされる大溝の下層から、7世紀半ば～7世紀後半頃の須恵器・土師器が出土したことで、建物の時期が推定されている。加えて、『日本書記』に見る「天武七年大地震」で発生した液状化現象による噴砂が東限大溝の底に堆積した7世紀後半の官衙関連の遺物包含層を貫いており、これも前身官衙の時期を比定する要因となっている。



Fig2 周辺地形・調査地点位置図(1/5,000)

Ⅲ. 調査の経緯

試掘調査の結果、当対象地の北半部に遺構が集中し、南半部は旧来の住宅基礎により削平を受けた部分が多いと判断された。本調査において、南半部は排土置き場およびテント設置箇所とし、北半部に調査トレンチを設定することにした。また、調査面積については建築予定床面積を対象面積とした。トレンチは既存の井戸や樹木を避けたため、変則的な形状となった。調査期間中は天候に恵まれ、当初の予定通りに実施することができた。調査は以下に記した手順で行った。

10月1日 発掘調査を開始する。調査トレンチを設定し、重機を用いて表土剥ぎを行う。掘立柱建物の柱掘形を検出。座標移動のための仮鎮を設置する。

10月2日 小雨の中、表土剥ぎを続行し、調査トレンチの表土剥ぎを終了する。

10月3日 テントを設置し、発掘機材一式の搬入を行う。座標点を調査区内に移動し、トータルステーションを用いてトレンチ位置図を作成する。遺構検出を行う。

10月6日 検出遺構の上端を測量機器で実測後、遺構の発掘を開始する。

10月13日 個別遺構は測量機器を用いずに実測し、SK10の土層の実測を行う。

10月16日 遺構配置図の実測を終える。パソコンで作図した図面の測点と結線を現場において点検する。SB90の柱痕跡を検出する。P1の埋土から須恵器の蓋が出土した。

10月17日 測量機器を用いて遺構の下端の実測を始める。東西走向の近世の溝SD100の発掘に入る。

10月20日 SD100の土層図作成。SB90柱掘形の観察を行う。

10月21日 早朝より写真撮影に備えて調査区内の清掃を行う。スカイマスターを使用し、調査区の全景および個別遺構の写真撮影を行う。SB90柱掘形を半截し、土層を観察する。

10月22日 掘り残しの遺構の発掘、SB90の柱掘形の清掃を行う。

10月23日 実測作業に専念する。

10月31日 重機を用いて埋め戻しを行う。発掘機材等を撤去し、現場における作業を終了する。



Fig3 重機による表土剥ぎ風景（南から）



Fig4 発掘風景（南から）



Fig5 トータルステーションによる実測風景（南東から）

IV. 検出遺構と遺物

1. 遺構について

調査区で検出した遺構は、試掘調査で推測されたとおり対象地の北半部に集中していた。南半部は遺構が散在した様相を示し、昭和期の建物の基礎が遺存していた。

また、近世の溝については部分的に掘り下げを行い、土層状態と掘形の観察に留め、遺構の完掘までは行わなかった。

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、溝7条、井戸2基、土坑2基とピットである。



Fig6 調査区全景（南から）



Fig7 遺構配置図(1/150)

S B90 (Fig8・9)

調査区のほぼ中央で検出した5間×3間の掘立柱建物である。近世の溝および現代の攪乱によって壊された柱掘形が目立つ。しかし、それぞれの柱掘形で、辛うじて柱痕跡を確認することができた。建物の計画方位は概9° 50' 東に傾く。西側柱列の総長は、9.35m、東側柱列では、9.60m、北側柱列は4.70m、南側柱列は4.55mを測り、均一な値を示していない。柱間の長さについては桁行で1.50~2.10m、梁間では1.10~1.75mを測り、桁行を梁間の間隔より広く取っている。なお柱間の長さの範囲を共に約60cmに揃えていることは興味深い。柱掘形は方形・隅丸長方形・楕円形と一定していなく、その規模も不揃いである。掘形の主軸は、南側柱列を除けば柱列を意識した掘り込みを行っている。ただし、隅柱に当たるP9は西側柱列に主軸を合わせ

P12は北側柱列に合わせている。これが、柱穴の掘り込みの順序を示すものであれば時計回りと言えよう。一方、南側柱列は掘形の規模は他と違って大きく、短軸でも83~102cmを測る。

P1の暗茶褐色の掘形埋土から、土師器の甕と須恵器の蓋が出土した。蓋は返しを持ち、この建物の創建時期に比定できよう。

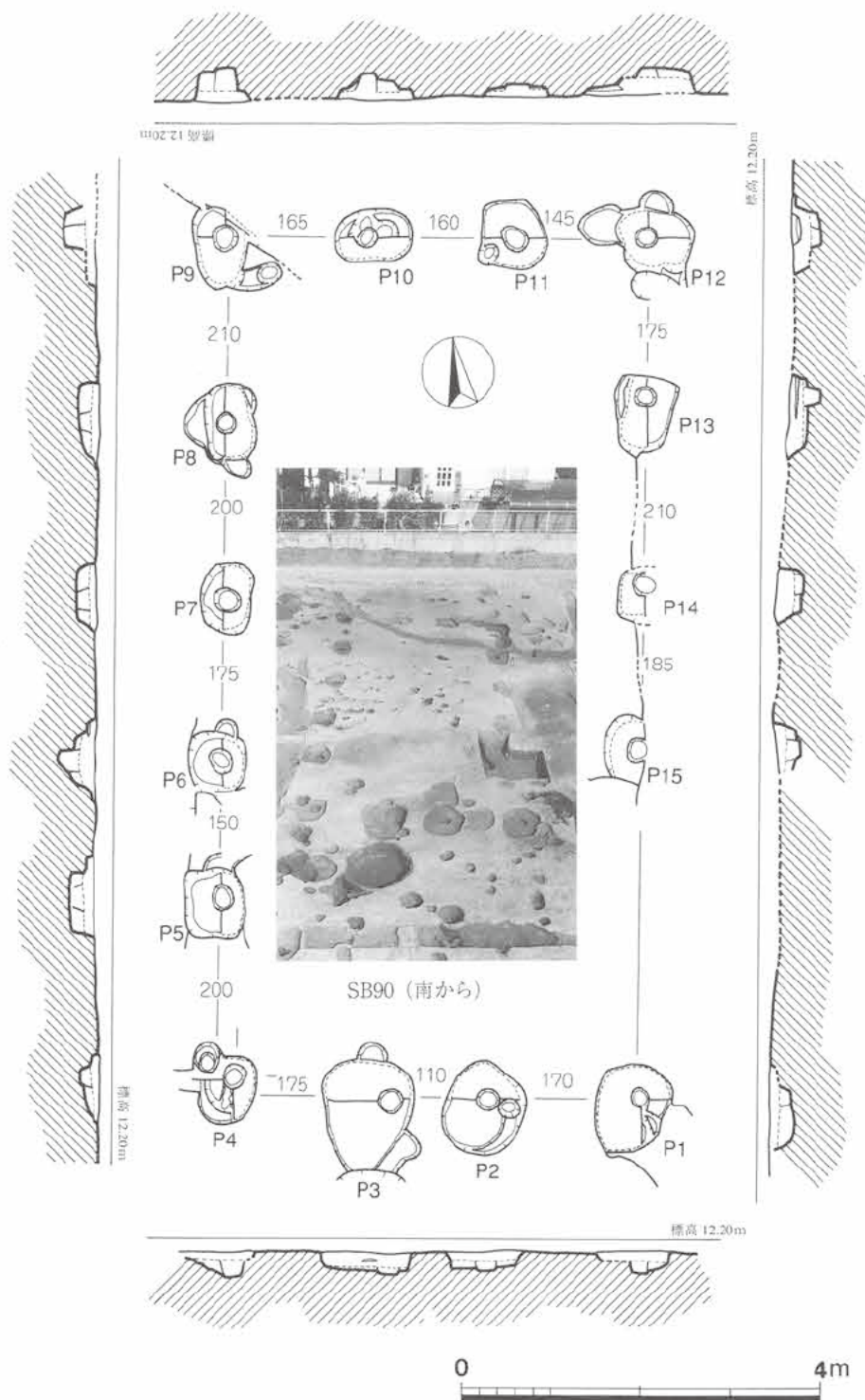


Fig8 SB90実測図(1/80)



Fig9 SB90P1須恵器蓋出土状態〈北西から〉

S D42 (Fig10~12)

調査区の中央を南北に走行する溝である。S D30と80に切られる。溝の上端90cm・下端65~75cm、現存深さ12~31cmを測る。底面は平端を保ち壁面は直に近い立ち上がりを示す。埋土は4層に分かれ、

第1・2層は掘り直しの埋土と考えられる。土師器・須恵器・白磁など多くの遺物が出土した。糸切りの底部を有するものはなく、下限は11世紀代に置けよう。

S D30 (Fig12・13)

南北に走行し調査

区の北側で西に方向を変えるL字形の溝である。S D49・56も同一方向に走行するが、共にS D30に切られる。西に折れた溝は上端48cm・下端29cm・深さ5cmとなり、南北走行部分の規模の $\frac{1}{2}$ 程度に縮小する。遺物は近世陶磁器が大半を占め、18世紀前~中頃の破片が出土している。

S D80

調査区の北側を東西に緩やかなS字状に蛇行する溝である。上端37~57cm、下端32cm、深さ8~27cmを測る。溝の断面形状はU字を呈する。底面は東に向かって標高を下げる。茶灰色土を埋土に持つ。出土した土師器はローリングを受けており、近世陶磁器の細片にその時期を委ねなければならない。

S D130 (Fig16)

調査区の中央やや南寄りで検出した東西走行の溝で、上端27~58cm、下端18~44cm、深さ4~16cmを測る。黒褐色土の埋土の中から近世陶磁器の細片が出土している。

S D100 (Fig14・15)

調査区の中央を東西に走行する溝である。上端98~144

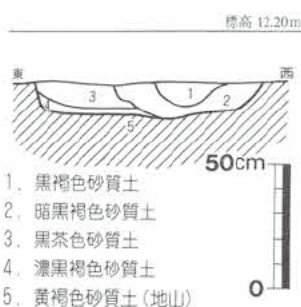


Fig10 SD42土層図(1/30)



Fig11 SD42土層状態（北から）



Fig12 SD42・30（南から）



Fig13 SD30・56・42土層状態（北から）

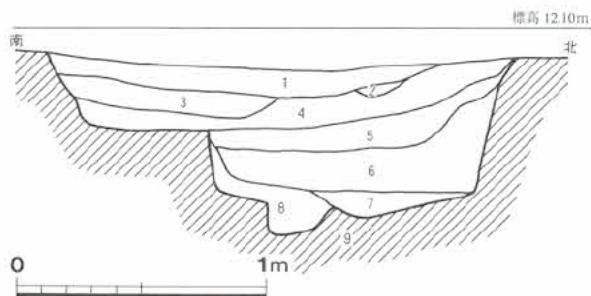


Fig14 SD100土層図(1/30)



Fig15 SD100遺物出土状態（西から）

cm、下端133cm、深さ27~40cm測る。第1~6層まで近世陶磁器が出土し、一括に埋められたことが確認できた。

S E 123 (Fig16)

S B 90P3を切る井戸で、直径135cmの円形を呈する。深さ40cm程掘り下げて止めたため、井戸枠等の検出には至らなかった。茶灰色の埋土から近世陶磁器が多く出土した。

S E 134 (Fig16)

調査区の南側で検出した。径は102~107cmの円形を呈する。上面の周囲に漆喰状の粉末が廻る。近世陶磁器が数



Fig16 SE123・134・S D130 (南から)

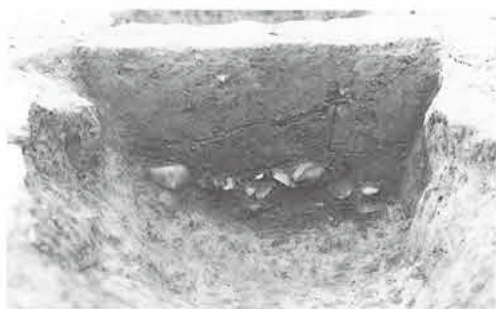


Fig17 SK10土層状態 (東から)

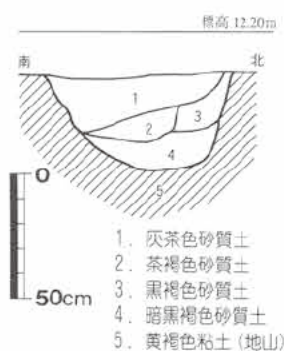


Fig18 SK10土層図(1/30)

点出土した。S E 123よりも古い。

S K 10 (Fig17~19)

調査区の南西隅で検出した土坑である。長軸280cm・幅76cm、深さ40cmを測る。略長方形の平面形を呈する。壁面は緩やかな傾斜を持つ東側に対し、他の壁は直に近い立ち上がりを示す。埋土は4層に分かれるが、北側から一気に埋められており第1層には地山ブロックが混入し、第4層には円礫が多量に混じる。遺物は近世陶磁器・瓦・木炭片などが多い。幕末から明治期の遺物が主体をなす。



Fig19 SK10 (東から)

S K 146

調査区の南端に検出した溝状の土坑である。全長は約500cm・幅45~100cmを測る。西から東に向かって標高を下る。出土遺物は陶磁器・瓦

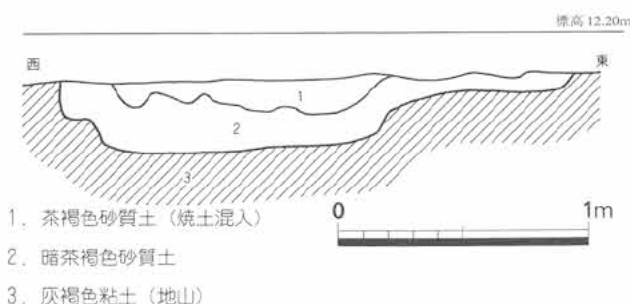


Fig20 SX14土層図(1/30)

片、石炭・スラグが数点あり、明治時代以降の土坑と考えられる。S D30を切る。

S X 14 (Fig20)

S K10の北側で検出した焼土の広がりである。暗茶褐色土に14cmの厚さまで赤褐色の焼土が混入している。遺構のプランは不整形をなす。その性格は判然としない。埋土からの遺物は縄文土器が1点だけ出土した。

2. 遺物について

今回の調査では、遺構出土の遺物はパンコンテナー10箱程度であった。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・白磁・瓦・石製品などの出土を見たが、近世陶磁器は総出土数の半数を越える程であった。

遺物の詳細については、後頁に掲載した遺物観察一覧表を参照していただきたい。

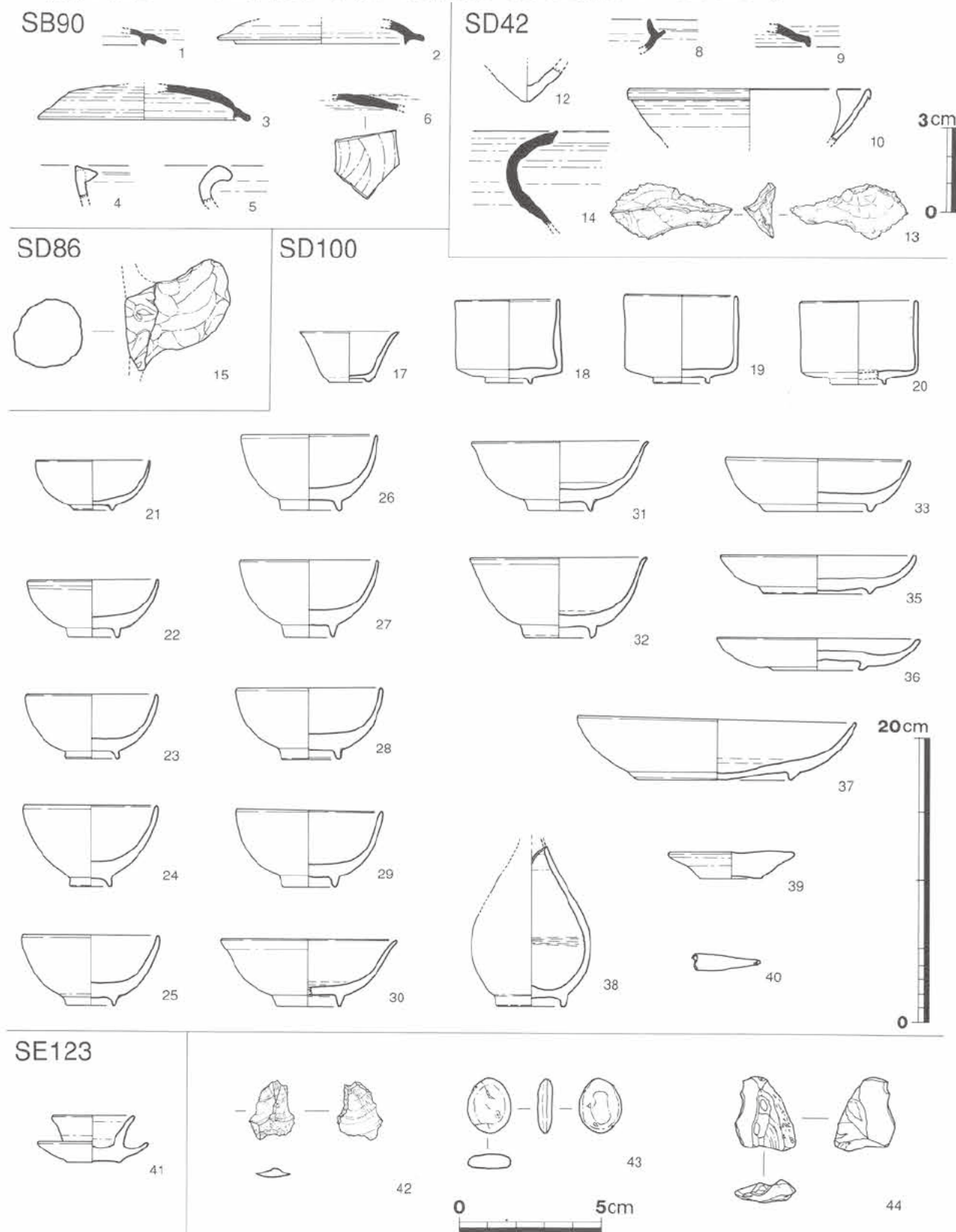


Fig21 遺物実測図(1/4・1/2)



3



10



17



4



11



18



5



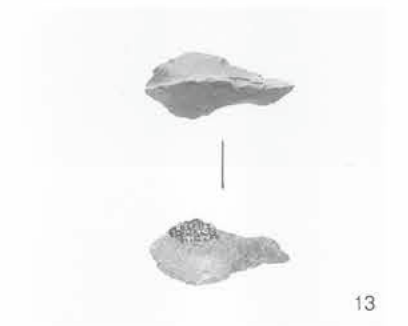
12



19



6



13



20



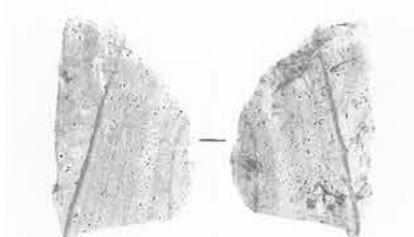
7



14



21



16



15



22



23

Fig22 出土遺物①



24



31



38



25



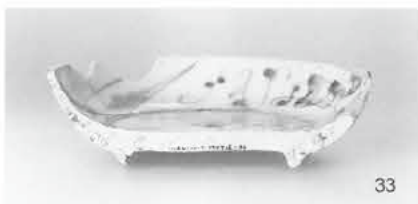
32



39



26



33



40



27



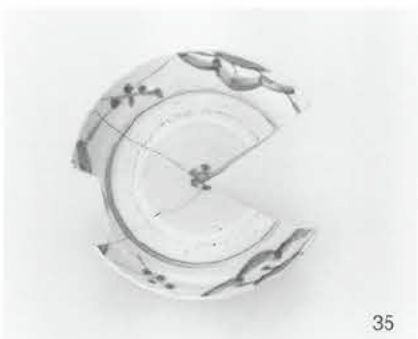
34



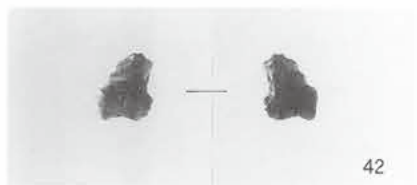
41



28



35



42



29



36



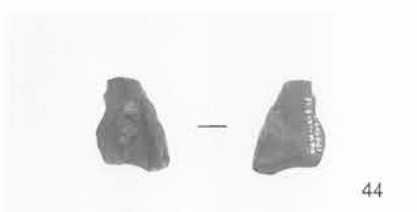
43



30



37



44

Fig23 出土遺物②

Tab1 遺物観察表①

IV. 検出遺構と遺物

Fig No.	出土遺構	器 種	法 量			調 整			胎土	色 調	焼成	備考	登録番号
			口径・長	底径・厚	器高・幅	外面	内面	底面					
21 1	SB90-P1	須恵器 蓋			(1.2)	回転ナデ	回転ナデ		1mm以下の砂粒が多量混入	暗茶灰色 灰黒色	やや良好		199726 00011
21 2	SB90-P1	須恵器 蓋	14.6		(1.7)	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ		1mm以下の砂粒を含む	淡青灰色	良好		199726 00012
21・22 3	SB90-P1	須恵器 蓋	15.0		(2.5)	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ		0.5・2mm大の砂粒を含む	茶褐色 黄黒色	良好		199726 00013
21・22 4	SB90-P3	土師器 甕			(2.3)	回転ナデ	不明		2mm以下の長石・砂粒含む	赤褐色	良好		199726 00014
21・22 5	SB90-P9	土師器 甕			(2.6)	回転ナデ	回転ナデ		赤色粒子を含む	淡橙色	良好		199726 00015
21・22 6	SB90-P13	須恵器 蓋			(1.1)	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ		金雲母・細砂粒を含む	黄灰色 暗青灰色	良好	内面が磨滅	199726 00016
22 7	SB90-P1	石製品 砥石	9.9	5.6	4.9				3面が磨滅				199726 00017
21 8	SD 42	須恵器 坏身			(2.2)	回転ナデ	回転ナデ		1mm以下の砂粒・黒色粒子	黄灰色 暗青灰色	良好		199726 00003
21 9	SD 42	須恵器 蓋			(1.6)	回転ナデ	回転ナデ		微砂粒精良	淡茶灰色 灰色	良好		199726 00004
21・22 10	SD 42	白磁碗	17.2		(3.8)	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ		黒色粒子を含む精良	(釉色) 緑灰色	良好	玉縁口縁	199726 00005
22 11	SD 42	石製品 砥石	(6.9)	4.5	2.6				表裏2面が磨滅				199726 00006
21・22 12	SD 42	弥生土器手ずくね			(2.4)	ナデ			角閃石・石英	茶褐色 黄褐色	良好	尖底	199726 00007
21・22 13	SD 42	サヌカイト 削器	2.03	1.01	4.37								199726 00008
21・22 14	SD 42	須恵器 甕			(6.7)	回転ナデ 格子叩き	回転ナデ 平行叩き		黒色粒子を含む精良	淡青灰色	良好		199726 00009
21・22 15	SD 86	土師器 把手	7.3	4.8	4.8	指頭押圧 ナデ	ナデ		角閃石・1mm以下の砂粒含む	黄橙色 茶黒色	良好	煤付着	199726 00010
22 16	SD 30	石製品 砥石	(4.4)	6.5	1.9				表裏2面が磨滅				199726 00002
Fig No.	出土遺構	器 種	法 量			染付 釉薬	装飾文様		特徴	底面・ 高台・内等	製作地	年代	登録番号
			口径・長	底径・厚	器高・幅		外面	内面					
21・22 17	SD 100	磁器 盃	7.0	3.0	3.7	白磁			端反			18C	199726 00030
21・22 18	SD 100	磁器 湯飲	7.4	3.4	5.9～ 6.0	染付	草花文	四方罽文	五弁花コンニャク印判		肥前	18C後	199726 00018
21・22 19	SD 100	磁器 湯飲	8.1	4.1	6.3	染付	竹林文	四方罽文	五弁花コンニャク印判		肥前	18C後	199726 00035
21・22 20	SD 100	磁器 湯飲	8.4	4.0	6.1	染付	雪の輪文	四方罽文			肥前	18C後	199726 00024
21・22 21	SD 100	磁器 碗	8.0	2.7	3.6	染付	若松文 花文				肥前	18C	199726 00031
21・22 22	SD 100	磁器 碗	9.2	3.6	3.9～ 4.1	染付	草花文		不均一な施釉		肥前	18C	199726 00032
21・22 23	SD 100	磁器 碗	9.3	3.8	4.6	染付	菊花文 コンニャク印判		くらわんか碗		肥前	18C前～中	199726 00020
21・23 24	SD 100	磁器 碗	9.4	2.9	5.8	染付	草花文か コンニャク印判		くらわんか碗		肥前	18C前～中	199726 00038
21・23 25	SD 100	磁器 碗	9.6		3.5	染付	岩に梅文		くらわんか碗		肥前	18C前～中	199726 00021
21・23 26	SD 100	磁器 碗	9.6	4.4	5.4	染付	桐・井桁に桐文 コンニャク印判		くらわんか碗		肥前	18C前～中	199726 00033
21・23 27	SD 100	磁器 碗	9.8	3.6	5.5	染付	岩に梅文		くらわんか碗		肥前	17C後 18C前	199726 00039
21・23 28	SD 100	磁器 碗	10.4	4.5	5.1	染付	宝文・丸文		くらわんか碗		肥前	18C後	199726 00022
21・23 29	SD 100	磁器 碗	10.4	3.9	5.3～ 5.5	染付	岩に梅文		くらわんか碗		肥前	18C	199726 00034
21・23 30	SD 100	磁器 碗	12.4	4.6	4.8	灰釉			蛇の目釉剥ぎ 端反碗		肥前	18C中	199726 00026
21・23 31	SD 100	磁器 碗	12.4	4.6	4.9～ 5.0	染付	草文	如意雲文か	蛇の目釉剥ぎ 五弁花コンニャク印判		肥前	18C中	199726 00023
21・23 32	SD 100	磁器 碗	12.4	5.0	5.6～ 5.7	染付	草文	如意雲文か	蛇の目釉剥ぎ 五弁花コンニャク印判		肥前	18C前～中	199726 00027

Tab2 遺物観察表②

Fig No.	出土遺構	器 種	法 量			染付 釉薬	装飾文様		特徴	底面・内面 高台等	製作地	年代	登録番号
			口径・長	底径・厚	器高・幅		外面	内面					
21・23 33	SD 100	磁器 皿	13.2	7.8	3.6~ 3.8	染付	唐草文	扇に葡萄文	五弁花コンニャク印判		肥前	18C中~末	199726 00036
23 34	SD 100	磁器 皿	12.9	7.9	3.8	染付	唐草文	扇に葡萄文	五弁花コンニャク印判		肥前	18C中~末	199726 00037
21・23 35	SD 100	磁器 皿	13.9	7.8	3.6~ 3.7	染付		半菊に宝文	蛇の目釉剥ぎ 五弁花コンニャク印判		肥前	18C中~末	199726 00019
21・23 36	SD 100	磁器 皿	14.4	6.5	2.3~ 2.4	染付		草花文	蛇の目釉剥ぎ 五弁花コンニャク印判		肥前	18C中~末	199726 00028
21・23 37	SD 100	磁器 皿	19.9	11.3	4.2~ 4.6	染付	唐草文	草花文	蛇の目釉剥ぎ 五弁花コンニャク印判		肥前	18C中~末	199726 00040
21・23 38	SD 100	磁器 瓶		4.9	(11.3)	染付	梅花文				肥前		199726 00029
21・23 39	SD 100	陶器 ハマ	9.0	4.5	2.0	鉄釉			上面に砂付着				199726 00025
21・23 40	SD 100	銅製品 煙管吸口	(4.9)	最大 1.13	最小径 0.47				ウラ片が残存				199726 00041
21・23 41	SD 100	陶器 灯明皿	7.9	3.9	3.3	鉄釉			糸切り		肥前		199726 00042
Fig No.	出土遺構	器 種	法 量			調 整			胎土	色調	焼成	備考	登録番号
			口径・長	底径・厚	器高・幅	外面	内面	底面					
21・23 42	SK 146	黒耀石 削器	2.08	0.37	1.61								199726 00043
21・23 43	SK 158	蛇紋岩 磨石	1.88	0.60	1.45								199726 00044
21・23 44	SP 16	磨石	2.78	0.80	2.17								199726 00001

《凡例》 1. 口径・底径・器高の数値の単位はcmである。

2. ()内の数値は現存値を示す。

V. まとめ

第151次調査地点は、過去に調査した地点と距離をおいている。試掘調査の結果に基づき、かつ、第67次調査で検出した掘立柱建物群の広がりやを考慮しながら調査を行った。結果は掘立柱建物1棟、溝7条、土坑2基、井戸2基などを検出した他、パンコンテナで10箱程の遺物が出土した。

まず、5間×3間の南北棟の掘立柱建物151 S B 90は、第62・67・94次調査で検出した南北棟建物よりも桁行で約1.3m短く、計画方位では9度程の差異が見られる。また、柱間については、後者の等間隔に對しばらつきがみられる。柱掘形は、方形または隅丸方形といった一定の形状に對し、様々な形状の掘形を呈している。このように151 S B 90は、S B 3064・3065・3090といった南北棟建物と様相を異にする点が多い。ただし、3棟の建物は同地点に柱列を揃えており、計画的に配置造営されたものと考えられる。一方時期に着眼すると、昭和61年度の報文では3棟は8世紀中~後半頃に比定したが、古宮地区の第1期国衙の調査成果および第89次調査検出のS D 3856（前身官衙東限大溝）底面出土の須恵器蓋などの遺物から第1期国府の前身となる7世紀末の筑後国府成立時に伴う官衙の建物と考えられる（久留米市史第12巻資料編考古）。151 S B 90はP1から出土した7世紀後半の須恵器の蓋に時期を委ねれば、上記3棟の建物と同時期に置くことができる。前身官衙の建物群が古宮地区の北東に集中しており、さらに東方へ広がり

を見せる状況を今回の調査で確認することができた。

第67次調査で検出された上記3棟の建物の東隣のS B 3092は調査段階で3面の庇が検出されているが、この建物も前身官衙を構成する中心となるものであろう。これらの配置状況からも前身官衙域を東および北へ求めることができよう。前身官衙の東限の大溝によって形成された撥形の地形は、方位を異にする建物の造営をもたらしたとも推測できよう。

次に、今回の調査で検出した遺構では近世の溝・土坑や井戸が注目される。いずれも多量の遺物が出土した。S D 100

は排水・区画の溝としての性格は否めないが、多量の遺物の出土状態を観察すると、溝状に掘られた廃棄土坑とも考えられる。S D 30は直線的に掘られた溝からL字に走向方位を変えたと推測できる。これら近世の遺構は、調査区の東隣を南北に走る旧幹線道に面した屋敷地に存するもので、18世紀前～幕末の所産である。調査区の北東100mに枝光天満宮が位置する。享保2年(1717)の祠や寶暦元年(1751)の鳥居、寶暦8年(1758)の手水鉢、天保5年(1834)・弘化5年(1848)の狛犬などが配され、近世の枝光村における生活・信仰の中核であったことを物語るものである。

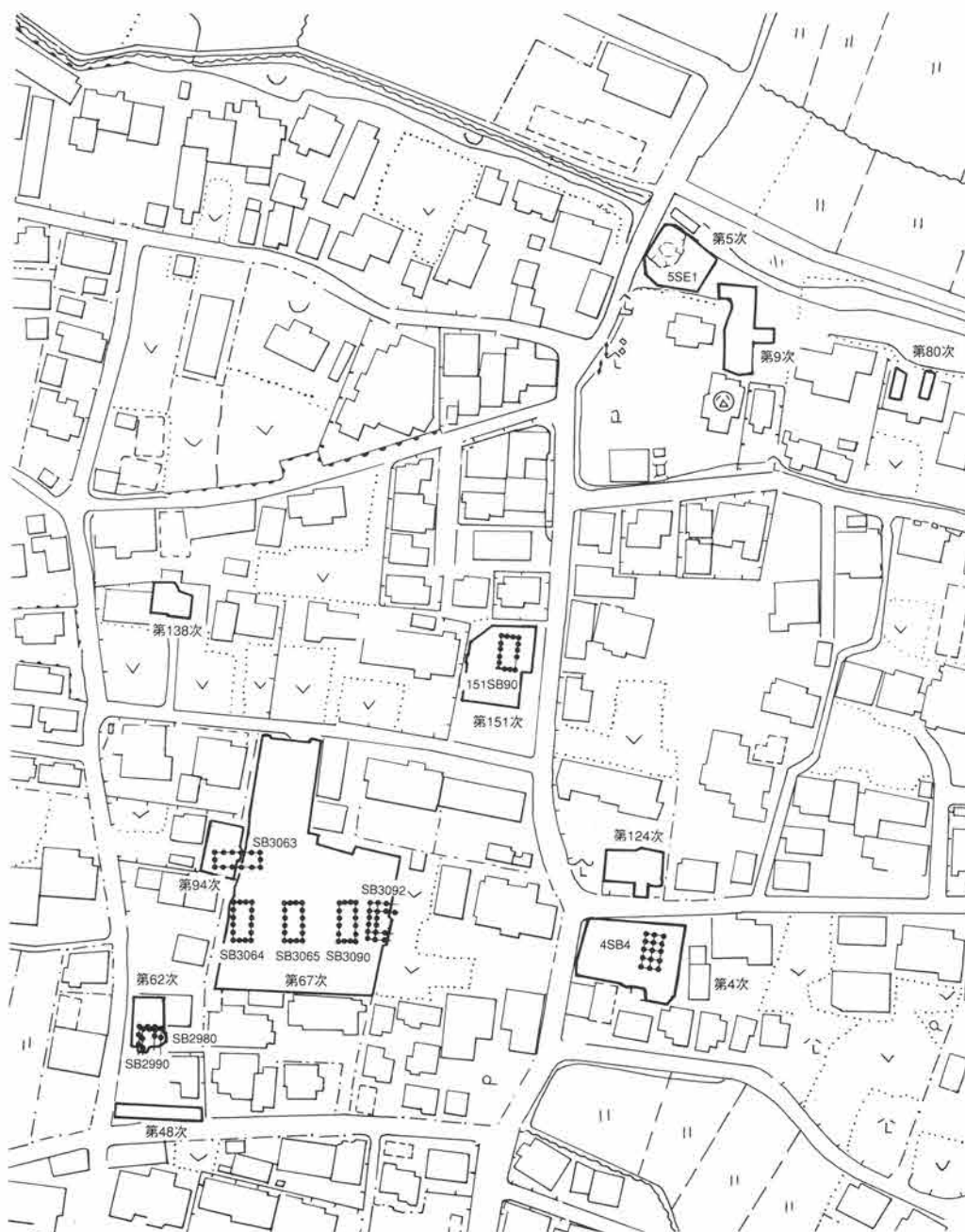


Fig24 調査区周辺主要遺構配置図 (1/2,000)



Fig25 枝光天満宮を望む (南西から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごくふあと だい151じちょうさ							
書名	筑後国府跡 第151次調査							
副書名								
巻次								
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第136集							
編著者名	園井 正隆							
編集機関	久留米市教育委員会							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL.0942-30-9225							
発行年月日	西暦1998年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村	遺跡番号	北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ちくごくふあと 筑後国府跡 だい 151 じちょうさ 第151次調査	ふくおかけんく る め し 福岡県久留米市 あいかわまちあざみなみ 合川町字南1143	40203	030112	33度18分49秒	130度32分30秒	1997年10月1日 ＼ 1997年10月31日	322m ²	共同住宅建設に伴う事前調査
収録遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
筑後国府跡 第151次調査	官衙跡	奈良時代 ＼ 江戸時代	掘立柱建物…………… 1 棟 土坑…………… 2 基 溝…………… 7 条 井戸…………… 2 基		土師器・須恵器・黒色土器・白磁・青磁・近世陶磁器・縄文土器・石製品・鉄製品		筑後国府の前身官衙に伴う5間×3間の南北棟掘立柱建物を検出した。 江戸期の溝は枝光村の集落の存在を物語る遺構といえる。	

筑後国府跡
—第151次調査—
久留米市文化財調査報告書 第136集
1998年2月28日
発行／久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3
編集／教育文化部文化財保護課
印刷／中村印刷有限会社